

もっと写真が楽しくなる

写真工業

Vol.63 No.676

2005

8

特集

6人のプロ作家にたずねた

私はフィルムとデジタルをこう使い分ける

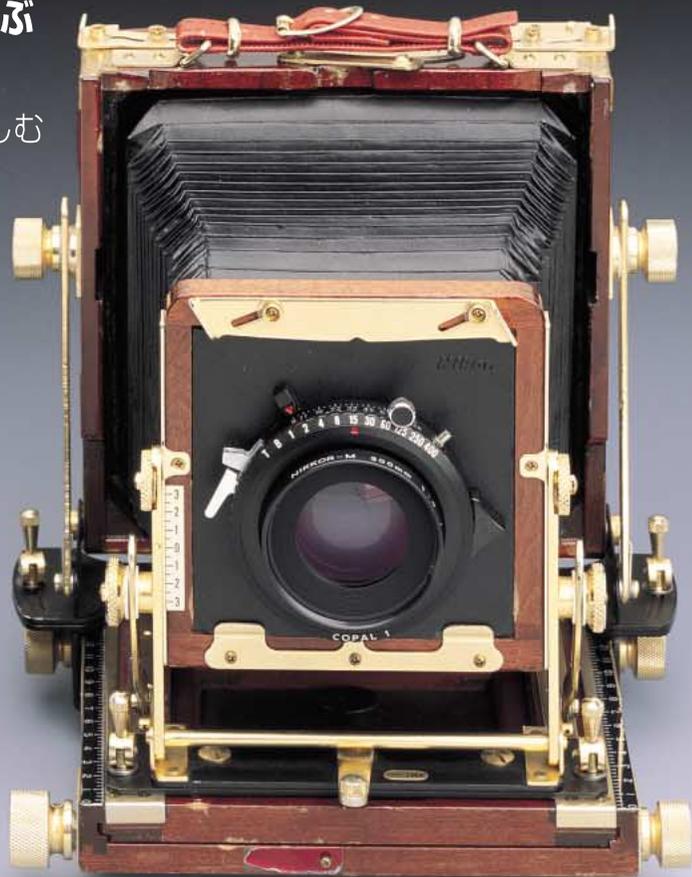
玉田勇の大判写真Q&A

忘れられた名門カメラ・レンズメーカーの研究 ①海外編

2人のライカ使いおおいに語る 赤城耕一 vs 神立尚紀

写真の展示スタイルを学ぶ

- What is Bokeh?
- コニカ赤外750の製造中止を惜しむ
- ゲルツ・ドグマー13.5cmF4.5
- エキザクタ/ボルシーC
- 原爆を撮った男たち



TEST

シグマアポ70~300mmF4~5.6DGマクロ
ニコンD50/コダック・エクタクロームE100GP

特集

私はフィルムとデジタルをこう使い分ける

- 美しい表現が可能なフィルムが中心 竹内 敏信 23 28
 最後の1割はフィルムにこだわりたい 佐藤 正三 24 30
 大切なのはバランス感覚 阿部 秀之 25 32
 フィルム現像の時間を省けるデジタル 小林 義明 22 34
 撮影手段が1つ増えたと考える 広渡 孝 26 36
 必要に応じて適材適所で 根本 泰人 26 38

- What is Bokeh? 本山博司 18
 忘れられた名門カメラ・レンズメーカーの研究 ①海外編 菅野 経敏 40
 玉田勇の大判写真Q&A 50
 2人のライカ使いおおいに語る 赤城耕一 VS 神立尚紀 58
 写真の展示スタイルを学ぶ 圓井 義典 65

NEW

- シグマアポ 70 ~ 300mm F4 ~ 5.6 DG マクロ 亀田 龍吉 10
 ニコン D50 亀田 龍吉 14
 コダック・エクタクローム E100GP 池田 卓 16
 続・光沢黑白プリントにこだわる エプソン MAXART K3 PX-5500 萩原 俊哉 13 76

単独・連載記事

- 竹内敏信の懐かしカメラ・海外編
初夏の十和田湖 頑固な一眼レフ「エキザクタ」 6
 古典名玉を探そう / 井上 康夫
ゲルツ・ドグマー 13.5cm F4.5 8
 便利な小物あれこれ / 中村 文夫
ケンコーデジタルフォトファイリングシステム 64
 特別レポート / 神原武昌
コニカ赤外750フィルムの製造中止を惜しむ 71
「さくら赤外750フィルム」の色素増感 写真工業の発展と尾形輝太郎の足跡 74
 箱の国から / 小池 徹
スターフレックス 75
 道具にこだわる / 山縣 基与志
仕上がりをイメージできる機材をセレクト 藤田修平さん 78
 平成写真師心得帖 / 柳沢 保正
写真はレンズで決まるもの 80
 写して楽しむクラシックカメラ / 伊藤 二良
ボルシー C 85
 撮るライカ / 神立 尚紀
新ツァイスレンズを使ってみて 91
 黑白写真の制作を学ぶ / 鈴木 孝史
ソラリゼーションとサバティエ効果 96
 時代を記録する写真 / 新藤 健一
原爆を撮った男たち 負の遺産をデジタル化 100
 写真真策 / 日比野 和範
写真のある至福の空間 カフェ・ギャラリー 105
 人を巡る / 萩谷 剛
カメラ販売60年、カメラのきむら会長 木村迪夫さん 108
 カメラを楽しむ工夫 / 深谷 宏
620フィルムスプールを作る 110
 ライカのアクセサリ / 中村 信一
ファインダー② 112
 FIRST LOOK
グレイベッサ R3A・R2A 21
コニカミノルタαスウィートデジタル 117
 新製品ニュース 118
 写真界ニュース 120
 読者の声 121
 次号予告 122

What is Bokeh?

—海外で人気のボケ味研究—

本山 博司

狙った被写体に焦点を合わせる。合わせた場所以外には焦点が合わないのぼけ。ボケ方はレンズによってさまざま。これをそのレンズのボケ味という。ボケ味はむろん写真作品に現れる。だからシャッターを切る前にファインダーで背景・前景のボケ味を確かめることもある。プロ・アマを問わず、カメラマンならこの程度は常識だろう（写真1）。

ところがそうではないのである。ただし欧米での話だ。カメラを世界で最初に作った欧州、カメラが世界で最初に普及した米国、写真を芸術として最初に確立した欧米で、なんと、いままで200年間ボケを表現法として意識的に語ったことがなかったのである。焦点を中心にした球面を撮影するのでもない限り写真作品はつねにどこかがぼけている。そうならそれを写真表現としてどう扱うべきかは当然考えなければならないはずだ。しかしどうやら欧米人は、つい最近まで考えたことがなかったらしいのだ。

Bokeh の語源は日本語

そんなこと信じられないといってもそうなのだ。そ



写真1 ドイツのアマチュアによるレンズのボケ味評価
http://www.bokeh.de/en/c75-90_28.html
©Christoph Breitkopf (<http://www.bokeh.de/>)

の証拠はインターネットにゴマン（正確には11万）とある。試しにGoogleでbokehと入れて検索してみられたい。そこには「bokehの語源は日本語で云々」と説明され、続いて本記事の冒頭のような解説があってさまざまな作例の写真作品があげられているものも多い。

筆者はとてども11万ページを全部調べることはできないが、最初の100ページのなかだけ見ても、すでにアメリカ、イギリス、イタリア、スペイン、デンマーク、ポーランド、チェコ、フランス、ロシア、中国、台湾の各言語のページで、「bokeh」が取り上げられている。

そのなかに、「私が最初にbokehという綴りを考案して雑誌の記事に書いた」とあるページを見つけた。
<http://www.luminous-landscape.com/columns/sm-04-04-04.shtml>。

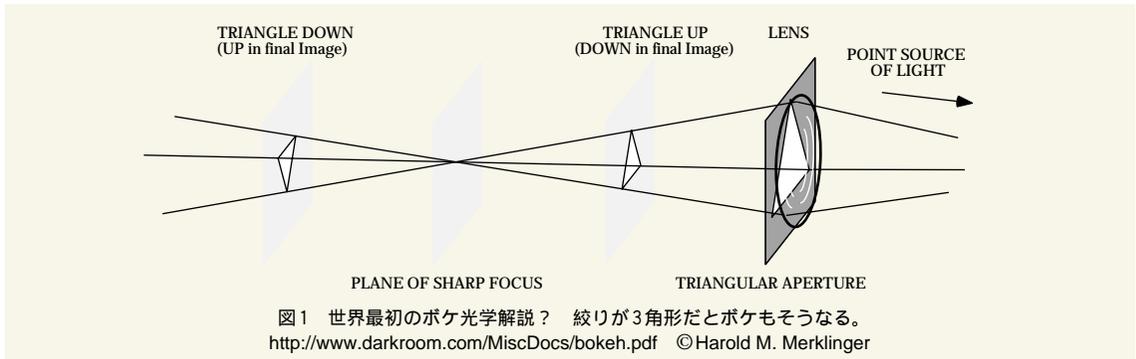
それはカナダの風景写真ファンのオンラインマガジン、「ルーミナス・ランドスケープ」である。

それによればこうだ。

1995年、筆者マイク・ジョンストン（Mike Johnston）は、カール・ウィーズ（Carl Weese）からボケとは何かを教えられた。そのウィーズは写真家オレン・グラッド（Oren Grad）からそれを教えられたのだった。そのグラッドは独学で日本語を勉強し日本のカメラ雑誌を読んでいた。そこでグラッドは「ボケ味」を知ったのだ。

ジョンストンは当時自分が編集していた雑誌フォトテクニクス（Photo Techniques）1997年3月4月号にボケ味特集を組んだ。そのなかで彼は「味」を取り去って「ボケ」とし、さらにbokeと綴るとボウクと読まれてしまうのを恐れ、bokehと綴ることにした。

したがってこの特集号がbokehの「火付け役」とみてよさそうである。特集は3本の記事から構成されている。その中の1つ、ハロルド・マークリンガ



ー (Harold M. Merklinger) が書いた「技術的に見た bokeh」は世界最初の bokeh 技術解説ということになる。3角形の絞りで撮った写真は、ハイライトのピークの光点も3角形になるようすを実写も交えてわかりやすく解説している (図1、写真2)。

<http://www.darkroom.com/MiscDocs/bokeh.pdf>

ジョンストンによれば同ページが掲載された去年の4月に bokeh で Google を検索すると 13,300 ページヒットしたそう。別のページに去年9月には 16,000 とあった。筆者の調査では今年4月には 35,000、今年6月21日現在で 117,000 ページだから、この1年で約4倍増したことになる。とくに最近数カ月はすごい。

この事実からすれば少なくともインターネットの世界でははっきり「“ bokeh ” 世界で爆発的大流行!!」とっていいだろう。

事実、写真3のキャプションにあるように欧米自身も「いまや bokeh は伝染病のように大流行している」と認識しているのだ。

<http://www.sonc.com/Bokeh.htm>

そのボケ味研究の内容は

さて、大流行している当の内容を少し具体的に見てみよう。筆者は英語しか読めないの、まことに残念だが取り上げる対象は英語のページのみである。

先に述べたとおりたいのページは、bokeh の語源、bokeh の光学的解説、bokeh の写真実例を載せている。bokeh の語源は「ボケ」なる日本語であることは、多くのページで解説されているが、中には「ワインの香りをブーケという。bokeh はこのブーケからきたのだ」という珍説もあった。

Bokeh のシミュレータもある。これはソフトウェアの話だが、デジタルの画像データを入力すると前景・背景がぼけた画像データが出力されるというもの。単に画面全体をぼかすソフトなら昔からあるが、ここでのいうのは、レンズによるボケ味をできるだけ忠実に

再現する機能だ。その一例に、Bokeh Renderer がある。このページでは錯乱円の特性や絞りの大きさをボタンで変更すると種々のボケ味が楽しめる。このようなソフトウェアはレンズ設計の際、ボケ味を確認するのに使えるかもしれない。

なおこの成果は世界的な学会誌に出ているので、bokeh はすでに学術用語にもなっている。

<http://www.flarg.com/bokeh.html>

bokeh の美しい写真集や、コンテストもいろいろある。見て楽しいのはやはり写真そのものだ。

以下はデジタル写真のボケ味コンテストの上位入賞者作品集である。

http://www.dpchallenge.com/challenge_results.php?CHALLENGE_ID=297&showfull=1

bokeh に関する掲示板も盛んである。多くの掲示板があっても全体像は把握しきれないが、ライカレンズのボケ味がよいということで、ライカが提供する掲示板は有名らしい。

http://www.leica-camera.com/discus_e/messages/3/59309.html?1081921549



写真2 3角形の絞りで撮影した例。ハイライトの光点も3角形になっていることに注目。
<http://www.darkroom.com/MiscDocs/bokeh.pdf>
 ©Harold M. Merklinger

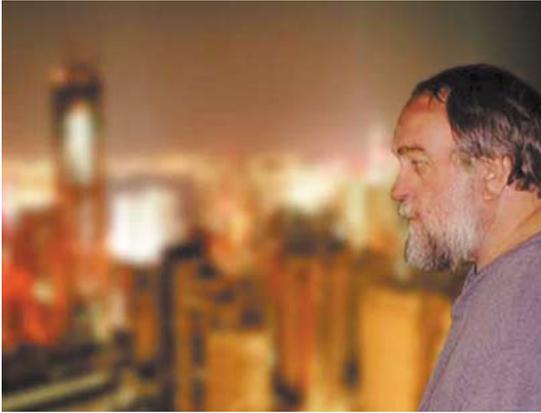


写真3 SonC氏ボケ伝染病禍に見まわれた街を視察(背景をPhotoshopでぼけさせたものを前景人物と合成したギャグ写真)
<http://www.sonc.com/Bokeh.htm> © Sonny Carter

単語“bokeh”の比喩的用例もある。すでにbokehの話は人口に膾炙(かいしゃ)しているので、写真にはとくに関係ない場所で洒落た使い方をすることもあつた。以下はBokehを自分の名前にしたブログの例である。このBokehさんはウェブサイトのデザイナーで、「自分の人生はボケのようなもの」なのでこう名乗つたのだといっている。

<http://bokeh.blogspot.com/>

今後bokehに関するさまざまな展開があるにちがいない。もちろん、光学的なものや、画像処理的な「理科系」はいうに及ばず、「文科系」でもいわばbokehologyともいふべき関心が生じるかもしれない。たとえば「bokehの写真美学」では「bokehはなぜ美しいか」が分析され、「bokehの文化人類学」では、日本や西洋の文化におけるbokehの位置付けが分析され、なぜ西洋ではbokeh認識がかくも遅れたかがおそらく徹底的に研究されるだろう。

以下のような「bokehは禅である」という説もある。「ボケの真意は『焦点が合わない部分のボケの質』というような技術的なところではなく、禅芸術にこそ通ずるのだ。なぜなら禅画もボケ味も重要な部分は注目している所ではなく、注目していない所にこそ出現しているからだ」

http://www.photo.net/bboard/q-and-a-fetch-msg?msg_id=003h0g

「bokehの受容史」では、ボケがbokehとして広まる歴史学が展開されるはずである。

こんな書き込みもある。「ガリレオの時代からレンズには良いボケや悪いボケがあつたことは明らかだが、西洋では単に日本ほどそのことに大きな注意を払つてこなかつた。19世紀の画家や写真家はボケの効

果をつねに意識していたにもかかわらず、ボケを表す言葉を使わなかつたのもうなづける。

http://www.photo.net/bboard/q-and-a-fetch-msg?msg_id=002eQq

思えば木漏れ日があえかにたゆたうのを好まぬ日本人はいない。映像の世界でも黒澤監督の映画「羅生門」に有名な木漏れ日のシーンがある。木漏れ日は無数の木の葉の針穴レンズが映し出す太陽の像である。1つ1つ大きさ、明るさ、ボケ方、ゆれ方がみな違う。つまり古来日本人は木漏れ日のボケ味を愛してきたともいえる。

しかしこれを「日本人の優れた感性」を示すものと声高に主張するいわばボケ・ナショナリズムには問題がありそうだ。日本人どおしで盛り上がるぶんにはよいが、欧米人に向けて自慢気にやればたちまち返り討ちに合うだろう。写真美は日本を含む世界の優れた感性が育ててきたものであり、ボケの美学はその一部分でしかない。写真の歴史をみれば他の多くの部分は欧米の写真家たちが築き上げてきたのは明白だからだ。

日本人によるボケ味研究の必要性

現今のbokeh大流行を機に、日本におけるボケ味の歴史やボケ味の現状を日本人自身の目で見直し、さらに現代日本のプロ・アマ写真家によればボケはどうなるのかその作品で討つて出る傾向もでてこよう。

世界にとって有益なのはむしろこの傾向である。ボケの美学は写真美の一部でしかないのだが、欧米にとっては新鮮な一部であることも事実だからだ。そこでもたらされる作品や情報こそ、いま一番世界が欲しがっていると思われる。

いささか即物的だが、ある掲示板には、以下のような主旨の書き込みがあつた。「日本のカメラ雑誌はレンズの解像度やコントラストとならべていつもボケ味を評価しているのに、西洋の雑誌にはそれが無い。日本の仲間に教えて欲しいのだが レンズのボケ味はどうか」

<http://zuiko.sls.bc.ca/swright/archives/1997/msg02265.html>

今後、欧米だけでなく新しい感性で写真美を変えていくに違いない一大勢力、中国、韓国、その他の東アジアの写真家たちが、世界の共通認識となつたbokehをどう料理していくかにも注目したい。日本とは似て非なる文化的背景をもつこれらの写真家たちは、またbokehの意味をも変えうるからだ。

(もとやま ひろし: Webウォッチャー)